



「京都の30歳!」編集長
宮崎健さん

■見本誌を見ましたが、京都の企業で働くごく普通のサラリーマンの生い立ちをずいぶん丁寧に追いかけてますね。

「ごく当たり前の隣のサラリーマンが何を考えているかを伝えようというのが、この雑誌のコンセプトなんです。同じように生きている若者たちが何に悩み、どうぐり抜けてきたかを知ってもらうことで、自分の生き方を発見してもらえれば、ということで。」

「オフビジネスに関する情報はものすごく多いのですが、働くことの真ん中の情報があまりにも不足していると思ひまして。」

■リクルートから脱サラして、40歳での創業ですね。なぜ30歳をテーマにしたんですか？

「自分自身が35歳のときに大変困った経験があるんです。職場での役割や責任は急激に増えていく、子供は小学校に入る、親が歳を取る、地域社会での責任も重くなる——。そういう中で、何のために働いているのか、見えなくなってしまっただけです。」

京都で働く30代をターゲットにした年2回刊誌が25日、誕生する。その名も「京都の30歳!」。創刊号の表紙には「名もなき京都の26人の、それぞれの『物語』をご紹介します」とある。何のために今、この雑誌を世に出すのか。発行人兼編集長のNPO ワーカーズ・オープンコミュニティ・エイド (WOOCA) 代表、宮崎健さんに、狙いを聞いた。



宮崎 健 (みやざき たけし)
1962年大阪府生まれ。NPO ワーカーズ・オープンコミュニティ・エイド代表。リクルートで16年間勤務した後、1年前に脱サラし、「京都の30歳!」創刊に取り組み。40歳。

働くことと真ん中の情報が足りない

「で、本やインターネットでいろいろと調べたんですが、それぞれの道で立身出世した個人事業者や経営者について書かれたものしかなかった。隣にいる普通のサラリーマンが何を考えているのかについての本や雑誌が全くないということに気づいたわけです。」

「昔は、いきなり起業するか、就職した先で勤め上げるか、という選択肢しかなかったわけですが、今は人の個性や状況に応じて多様な働き方が認められるようになってきた。ところが、見本はどこにもないし、誰も教えてくれない。就労形態や生き方を自分で考えなければならぬ。そのためには、隣の人と比べてみることができるとコミュニケーションの場が必要だと考えたんです。」

「(NHKの人気テレビ番組)『プロジェクトX』の登場によって、上の世代は燃え上がり、ガンパロウという気になった。でも過去の成功体験を見ただけからといって、今、『半歩踏み出そう』とはならないでしょう。あれも『偉大な人たち』の物語なんです。」

■ずいぶん考えて準備したんですか？

「むしろ私の場合、会社が設けていた早期退職制度に基づいて辞めることに価値がある、と考えてました。辞めること先にありきだったんです。何ができて、何ができて、何をしなければならぬかは、退職を決めてから半

年ほど考えました。」

「実は、リクルートに入ったときには、定年までしがみついてもやると言っていたんです。リクルートの同期生はみな『いずれ独立起業する』と異口同音に言っていたのですが。」

「でも、会社の側が変わってしまった。かつてのリクルートは製販一体の事業形態だったのですが、今は販売は流通に任せる製造業型になってます。私の役回りも変わってしまった。そこに早期退職制度があったわけです。」

■起業に当たって周囲の反応はどうでした？

「やめとけと言われましたね。ぜったいにビジネスにならない、売れない広告も取れないと言われましたね。」

「でも、ビジネスモデルありきではなく、思いから始まるビジネスもあっていいのではないかと思ってました。そしたら、3-4名の成長企業の経営者に『やるなら情熱で突っ走るしかないね』と言われて、それならやろうかと。」

■30代の動きには経営者も関心を示すのでは？

「そうですね。経営者の方々にヒアリングすると『30代の現場の核なのに急にいなくなる』という印象を持っているようで。」

「彼らは氷河期に入ってから就職活動をしているから、真面目なんです。だから、会社が生産性向上のために次々と打ち出す新しい施策に真正面から取り組もうとして、やがてパンクしてしまう。そういう30代との付き合い方を真剣に考えようという経営者は多いと思います。」

■大人になるのが遅かったのに、30代になるといきなり大人になるよう迫られると。

「創刊にあたって調査をしたところ、30代は3つのパターンに分かれることが分かりました。第1が『夢に直進』型、第2が『夢に夢見る』型、そして第3が『夢に尻込み』型。早いところ『夢に夢見る』型を卒業して欲しいなと思いますね。」

■そのためにも隣人を知れと。

「違う働き方をしている人と話をし、比較していかなければ自分らしさは分からない。今までは企業内コミュニティでそれがまかなわれてきたのですが、これからは会社の外、都市の中にそういうコミュニティをつくっていかなければ。そういうコミュニティをつくるきっかけとして、この雑誌を位置づけています。」

「大西辰彦の起業家探訪」は休みます。